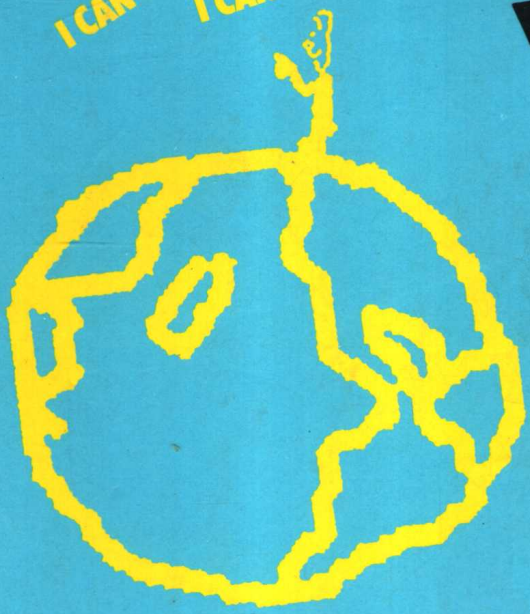
世界が見える 日本が見える

マッキンゼー日本支社長
大前研一

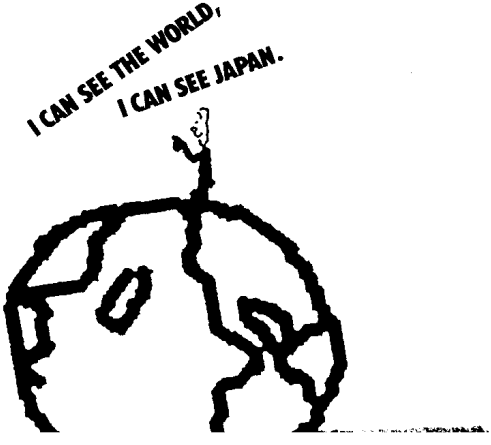
I CAN SEE THE WORLD,
I CAN SEE JAPAN.



講談社

マッキンゼー日本支社長
大前研一

世界が見える日本が見える



世界が見える／日本が見える

1986年1月1日　第1刷発行
1986年12月4日　第12刷発行
定　価　1200円
著　者　大前研一
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目 12-21 郵便番号 112
電　話　東京(03)945-1111(大代表)
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社堅省堂

© Kenichi Ohmae 1986, Printed in Japan

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN4-06-202333-4 (0)　(学三)

世界が見える／日本が見える

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

目

次

はじめに 13
新しい国富論
いまだ抜けぬ書生気分
日本が世界で「リーダーシップ」を発揮するときがきた
第一部 危険な錯覚 29
1 「経済大国日本」の危機
あまりにも「世間知らず」な日本
「錯覚」が生み出す国家間の緊張
崩れ去る「日本的経営」の神話
米国に劣る経営および企業家精神
「自由貿易の旗手」と自惚れるまえに
「ゼロ・ベース」で日本を考える
2 企業に国境はない 50
企業が動かす世界経済
日米間に「不均衡」は存在しない
「一〇〇ドル余計に」買えない理由

日本企業に「国際経営力」はない
「閉鎖された市場」の誤解
非関税障壁（ノンタリフバリア）の実態
3 アメリカとつきあうには
「アメリカ」という抽象名詞
「おめでたい」日本評価ブームの実態は
「商務省レポート」が日本を攻撃する
突発性の国粋主義
恐るデトロイト
報道を「正しく」コントロールする
戦略的に〝米（コメ）〟を考えると
4 ヨーロッパは「遠い」か？
互いに「遠い」日本とヨーロッパ
無視できないヨーロッパの技術力
ヨーロッパの企業はなぜ弱い？
5 「先進国日本」の幻想
がっかりさせる成田空港
世界のエア・ポート
108
96
72

成田空港は「陸の孤島」
サービスが最低の国内線
公的機関は「誰のため」に存在する？
高速で走れない日本の「高速道路」
「公的なもの」に忍従する日本人
消えていくべき「お役所仕事」
アメリカの住民サビース・免許取得システム

第二部　世界とコミュニケーション

6　コミュニケーションの確立をめざせ
日米の自己主張の仕方のちがい
アメリカ人を相手に「有効な論陣」を張る
英語によるコミュニケーションのむずかしさ
近づくほど遠ざかる「ニュアンスの領域」
インターナル・トランスレーター
日本もアメリカも「外交」下手
7　世論の操作・報道のコントロール
とにかく「事実」を知らせよう
報道のメカニズムをつかめ

世論は〝嘘〟であっても力をもつ
誤解を招く「見出し」の存在
『ビジネス・ウィーク』の反日編集方針
アイアコッカの「黄禍論」
水際立ったホンダの反撃
ファイティング・ポーズをきめて
8　国際感覚を採点する
国際的な「立居ふるまい」とは
「IBMスパイ事件」にみる対処のまずさ
海外で力を発揮する「個人企業」
コーポレイト・アイデンティティを「PR」する
個人を「PR」する
「ヒト」を通してしか理解されないもの

172

第三部　トライアドの世界観

9　トライアドの世界観
「一万ドルクラブ」入会
「国境」の消えた消費生活

193

「六億の市場」をイメージする
「六億の市場」のビジネス・チャンス
「連合体(コンソーシア)」で生き残れ
世界企業——本社はアンカレッジに
トライアドの世界観
10 世界企業へのストラテジイ
「共通言語」を構築せよ
MBI——世界に通用する企業人の育成
製品コンセプトの「微調整」
伝送ゲームがダメなわけ
「儲け」の発生するメカニズム
ネゴシエーション・スキル(1)
ネゴシエーション・スキル(2)
11 展開するビジネス・ゲーム
膠着化した乗用車
にらみあうフィルム・メーカー
カラーテレビ戦争のいきづまり
メディカル・エレクトロニクスのシェア争い

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

一億ドルのブランド戦略
日本市場の欧米企業
新しい波
日米技術革新競争

第四部　二十一世紀へのウォーミング・アップ

12　アジアにおける日本の役割

東南アジア諸国の実情と今後
途上国援助とブーメラン効果
中進国シンガポールへの提言
アジアで空洞化する日本
国家の役割・世界市民への道

13　変革期の先進諸国（JUE）

自由主義経済の「ルール」
「資源国」への逆転
日本の存立基盤の再確認
世界は「本質的な変化」を遂げた
別の世界が見えてくる
頂をめざせ

装幀／川上成夫
カバーイラスト／古川タク

世界が見える／日本が見える

はじめに

新しい国富論

日本は資源大国である。今世紀の終りから二十一世紀にかけての国富論は情報化社会への移行を抜きにしては語れない。これからの社会で成功する鍵は優秀な人材である。高度に教育された人材の質と数が国の盛衰を決める。その意味では一億二〇〇〇万の良質な人材を擁する日本は成功のために必要な資源を世界でも最も豊富にもった国、ということになる。同じ人材でも教育レベルが低く、勤労意欲や職のない人口は富を生む資源とはなり得ず、単に食わせなくてはならない胃袋である。かつての日本は一億人をどうやって食べさせてゆくかが最大の課題であり、われわれも食うために必死に働いた。人口が国にとって負担になっていたわけだ。しかしユダヤ人とならぶ向上心と家庭における勉学への関心が、世界でも稀な、平均値の高い人口構成をつくり出したいまとなっては、この人口の多さは富の創出に対する資源そのものの豊かさになっている。

反対に、わずか十年前には〝猛威〟を振ったOPECをはじめとする天然資源大国は、結局天然資源だけでは国づくりさえできないということに思い至り、いまではすっかりおとなしく、まるで借りてきた猫のようになってしまった。天然資源大国であるオーストラリアは五年連続の不景気で、しかも過去百年間の経済成長率は、老宗主国イギリスさえ下回る、という惨状である。インドネシアにしても、資源をもたないシンガポール、台湾、韓国にはるかに遅れをとり、一人あたりのGNPは日本の十分の一以下、という状況である。アラブ諸国も全体のバランスからみると不釣合な港湾施設、大学、市庁舎などの建ったところは多いが、石油がなくなったときに富を生みつづける工業化への布石ということになると、残念ながらその緒についたばかりで、決してうまくいっているとはいえない。その上石油価格の下落によって国づくりそのものも大幅にベースダウンせざるを得ない現状である。アメリカに至っては富の権化、農産物から石油、ウランに至るまで世界の天然、自然の資源を一人占めして、今世紀なかばには世界中の垂涎の的であったのに、いまでは一転して債務国になってしまっている。

日本は明治以来一貫して資源小国としての命運を背負い、この十字架を強烈に意識することにより生きてきた。資源を求め、富国強兵策をとった結果が第二次大戦における無条件降伏である。戦後もまた、一貫して「加工貿易立国」を教条として生きてきた。われわれの小学校時代の教育をみれば、これがいかに徹底していたかがわかる。いわく「日本は資源をもたない小さな島国である。その国土の八〇パーセントは山地で、わずかな平地に一億人がうごめいてい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co